

棚田学会通信

第19号 2006年6月26日

発行/棚田学会

〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときゃらばん内)

TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



- ◆巻頭言：大蔵村村長 半田庄一郎 2
- ◆新潟中越被災地から
 - ・「棚田を取り戻す為に」旧山古志村村長（長岡市）衆議院議員 長島忠美 2
- ◆海外での取り組み
 - ・「第4回世界水フォーラムに参加して」
独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農村工学研究所
山岡和純（棚田学会理事） 3
- ◆会員通信
 - ・「泉佐野市大木の棚田と日根荘の景観」歴史館いずみさの学芸員 廣田浩治 4
 - ・「棚田の復旧や地域の諸資源を活用」
小谷村「中谷郷が元気になる会」吉田忠文（農政ジャーナリストの会） 5
 - ・「土谷棚田の火祭りが“ふるさとイベント大賞”を受賞」安井一臣（東京都練馬区） 6
- ◆日本の棚田百選
 - ・「山浦早水の棚田」渡辺信雄（大分県玖珠町） 7
- ◆官庁ニュース
 - ・「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業について」
農林水産省農村振興局地域整備課課長補佐（中山間事業調整班担当）日置秀彦 8
- ◆事務局ニュース 9
 - ・「棚田学会賞の授賞について」
 - ・「平成18年度棚田学会大会」
 - ・「第15回現地見学会『山古志の棚田』」
 - ・「雲南省元陽県の棚田現地見学会報告」発行のお知らせ

巻頭言

四ヶ村の棚田は 産業振興の重要なポイント

山形県大蔵村村長 半田庄一郎

大蔵村は、山形県のほぼ中央部に位置し、村の中央を国道458号線が縦断、その中央部に名湯肘折温泉と四ヶ村の棚田がある。

四ヶ村（しかむら）という呼び名は、豊牧、滝の沢、沼の台、平林の四集落の総称であり、この四集落全体に広がる千枚を越える段差のある田園風景を「四ヶ村の棚田」と呼ぶ。

農林水産省認定の「棚田百選」のひとつ豊牧地区横道沢の棚田は、圃場枚数が135枚、面積が12.5㌖、最下部から見上げると空が丸く見えてしまうほど広大で、まるで自然のスタジアムの中にいるような錯覚に陥る。

平成11年7月、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定され、一躍注目の的となったが、それまでは、農家泣かせの厄介な田圃としか見られなかった。遠い祖先が生きるために人力で山を開墾して以来豪雪と戦い、あるいは地滑りなどの計り知れない困難と戦いながらかけがえのない財産を受け継ぎ、必死に守っている地元の人々には頭の下がる思いである。

昨年10月に北海道美瑛町、赤井川村、岐阜県白川村、長野県大鹿村、徳島県上勝町、熊本県南小国町、そして本村の7町村で「日本で最も美しい村」連合を立ち上げた。失ったら二度と取り戻せない日本の農山村の景観や、環境、文化を守り、

将来にわたって美しい地域を守り続けることで、観光付加価値を高め、地域資源の保護と地域経済の発展を図ろうとするもので、活動をスタートさせたところである。

本村は、自然条件や地理的条件が極めて厳しい立地にあるが、美しい自然は豊富に存在する。美しい環境に暮らす人、作られる物、文化、景観等はこれからの時代における貴重な資源として新しい形の農村と都市との対流が生まれる可能性を秘めており、村における農業や観光等の産業の振興においても重要なポイントになるものと考えている。

そういう意味において農山村にこそ都会にはない素晴らしい資源が溢れており、それを守るとともに、村、あるいは社会全体の責務と考えている。

現在は四ヶ村地区の住民も一丸となり、何としても棚田を守ろうという機運で盛り上がりを見せており、平成16年から棚田を利用した地区民手づくりの「ほたる火祭り」を開催している。その様はまさしく百万ドルの夜景の田舎版である。今年にはさらに「ほたる火祭り」にあわせコンサートを実施する予定である。

また、当地は全国でも有数の豪雪地で、厳しい自然があるところには、より美しい自然とおいしい食があると自負している。

この「ほたる火祭り」と食を村の唯一の観光地であり国民保健温泉地である元祖湯治の村「肘折温泉郷」への誘客に結びつけ村の活性化につなげたい。

新潟中越被災地から

棚田を取り戻す為に

旧山古志村村長（長岡市）

衆議院議員 長島忠美

平成16年10月23日午後5時56分、この時から、私達の運命は大きく変わりました。私達はふる里を失ってしまったのです。全ての人々が絶望の淵に立たされ、嘆く事さえ出来なくなっていました。

そんな時、多くの皆さんから温かい支援が寄せられました。棚田学会の皆さんからも大きな御支援とたくさんの優しさを頂きました。心から感

謝をしております。今はそれしかできません。ふる里に帰る事、山の暮らしを取り戻す事が何よりも皆さんの御支援に応えられる事だと思っています。

地震当時、村長であった私にとって、人間の力の及ばない自然の力の大きさを思い知らされた様な気がします。平和な土曜日の夕方でした。突然、激しく大地が鳴り、揺れました。何が何だか分からない状況でした。でもここで死んでしまうんだと言う恐怖を覚えたのは事実です。真っ暗闇の中で電話も通じない、携帯電話さえ繋がらない。とにかく役場で指揮をと思って、家族と近所の人に安全な場所に避難をしないと言っただけで家を出てか

ら1年半が過ぎました。災害は誰のせいでもありません。誰を恨む事も出来ません。でも悲しい大きな傷跡が残されました。

翌日、夜が白み始めて見た光景を忘れることは出来ません。大切に大切に守った生活の全てが染み込んだ、道が、田んぼが、家が、悲しく姿を変えていました。そこにあったのは破壊され尽くしたふるりの姿です。とにかく村民の生命を守らなければ。それが行政に与えられた使命です。迷う事と間違える事は絶対に許されない世界でした。時間の経過と共に孤立した状況。絶えず続く余震の中で恐怖に身をさらされている事。当初思った程、生易しい世界ではありませんでした。

本当は全村避難と言うのは一番したくなかった決断です。村の中で歴史と文化と生活と何よりも生命を守りたかった。でも厳しい現実の前に、とにかく明るくて暖かい所へ全村民に避難をして頂きました。失ったものは確かに大きかったです。でも多くの事を経験の中から学ぶ事が出来ました。支え合って暮らしてきた山の暮らし、そのコミュニティが大切なのだと知りました。そして全国の皆さんの大きな御支援と関係機関の御尽力に

対し、感謝の心を持つ事が出来ました。ありがとうございますと言う事が出来たのは私達にとって大きな誇りです。何よりも山の暮らしが大好きだ、再び帰りたい、どんなに時間がかかってもふる里を取り戻そう、みんなで力を合わせてと言ってくれた事が私には大きな心の支えでした。

地震から一年半が過ぎました。まだ90%以上の人が仮設住宅で暮らしています。今、私達のふる里は私達を待っていてくれています。あの地で暮らすと言う事、それは住むだけではないと思っています。私達はあの地で住む事が生き甲斐であり、歴史や文化やふる里の全てを守る事だと思っています。心温かな日本のふる里として、日本人の心のより所となれる様な山の暮らしを再生したいと思います。生活のにおいのする棚田に黄金色の稲穂が実る日が必ず来ると信じています。その時、改めて皆さんに感謝の気持ちを伝えられそうな気がします。

日本の山の暮らしを棚田と共に皆さんに見守って欲しいと願っています。本当にありがとうございました。

海外での取り組み

第4回世界水フォーラムに参加して

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構
農村工学研究所 山岡 和 純 (棚田学会理事)

今回で第4回目となる世界水フォーラム(WWF4)が、3月16日から22日までの7日間、メキシコシティで開催され、世界約140ヶ国から19,000名を超える参加者が集まった。第3回世界水フォーラムを京都・大阪・滋賀で3年前に開催した日本からは、皇太子殿下をはじめ政府、研究機関、企業、NGO等から300名以上が参加して大いに盛り上げた。

主会場となったバナメックスセンターは、市の中心部から車で西へ20分ほどの地域に立地していた。まだ真新しい巨大な建物の内部には、国際会議場や見本市会場として使えるホールがいくつも配置され、隣接する競馬場の緑のターフが、広々とした庭園のようなパノラマ的借景となっていた。この会場で、約150のセッション(分科会)と共に、各国や企業のブースが様々な展示を競う世界水エキスポが連日開催された。

日本から参加した関係者は、約30のセッションを主催又は共催したほか、世界水エキスポ会場

では、海外からの出展中最大規模のジャパン・パビリオンの区画内に、それぞれ意趣を凝らしたブースを立ち上げ、様々な角度から国際的な情報発信を行った。

世界水フォーラムに対して日本は、水問題の本質である「人間の安全保障」のための国際協力を外交の中心に据えると共に、国土の特性や歴史的背景から蓄積された水政策に関する日本の広範かつ優れた知見を国際協力に活かすことを基本的な立場としている。今回のテーマである「地球規模の課題のための地域行動」に関しても、国際世論



INWEPF 展示ブースを視察される皇太子殿下と橋本元総理
(撮影・筆者)

の関心喚起、政策提言、情報共有、能力向上等に向けた積極的な貢献を意図している。

このため、皇太子殿下（第3回世界水フォーラム名誉総裁）が16日の開会式に出席され挨拶を述べられ、翌17日に「江戸と水運」と題する基調講演をなされたのをはじめ、農業関係では、「水田における持続的な水利用と多面的機能、より良いガバナンス」をテーマに、INWEPF（国際水田・水環境ネットワーク）とICID-ASRWG（国際かんがい排水委員会アジア地域作業部会）が20日にセッションを開催し、約100名の参加者が熱心な討議を行った。同セッションの前半にはINWEPF設立の経緯等に関する中條農林水産省農村振興局次長のプレゼンテーションなどを、また、後半にはIWMI（国際水管理研究所）、MRC（メコン河委員会）ラムサール条約事務局、タイ、韓国、日本の代表者からなるパネルディスカッションを行った。後半の冒頭に筆者が、多面的機能に関す

る話題提供者として、日本やモンスーンアジア各国の美しい棚田景観のスライド多数を紹介した。同セッションは成果として「INWEPFからWWF4へ向けてのメッセージ」を発表し、WWF4事務局に提出した。

また、世界水エキスポのジャパン・パビリオンでは、水田や農業用水が有する多面的機能の重要性を啓発するINWEPFの展示ブースが設置され、ここでも各地の棚田景観の迫力ある写真ポスターやスライドショーなどが来訪者の好評を博した。同ブースには、皇太子殿下、江崎国土交通副大臣、江田環境副大臣、金容徳韓国建設運輸副大臣をはじめ、多数の要人、一般参加者が訪れた。同時に開催された閣僚級会合では「第4回世界水フォーラム閣僚宣言」を採択し、さらに、次回のWWF5を2009年にトルコのイスタンブールで開催することを決めて、一週間のフォーラムは閉幕した。

会員通信

泉佐野市大木の棚田と 日根荘の景観

歴史館いずみさの学芸員 廣田浩治

「わせとかれ 日根野につく 入山田」

戦国時代初期の文亀元（1504）年、家領である和泉国日根荘入山田村に下った領主・前関白九条政基は、夢の中で入山田村の情景を詠じた和歌（発句のみ）を聞いた（政基の在荘日記「政基公旅引付」文亀元年4月28日条）。夢想の発句ではあるが、谷あいに入山田村で早稲の水田景観が広がっていたことを物語る和歌である。

入山田村は、最高の公家権門である九条関白家が支配した日根荘（大阪府泉佐野市）の一つの村で、現在の泉佐野市大木・土丸にあたる。このうちの大木が九条政基の滞在した村で、樫井川の上流、和泉葛城山脈の山裾に抱かれた山間部の村である。

大木では、鎌倉前期の文暦元（1234）年の田畠在家実検注文の作成までに、井堰と溜め池が築かれ水田開発が進んでいた（「九条家文書」）。実検注文にみえる水田は「淵」「谷」「垣内」「窪」「原」地名の地に造成されている。水の得やすい「淵」「谷」から水田開発が始められ、有力農民の「垣内」（家宅を中心とした囲い込み地）の水田化が進み、次いで段丘上の安定した「窪」（窪地）や「原」でも水田造成が展開していた。さらにより低段丘

面の「大河内」（樫井川の旧氾濫原）にも水田が築かれつつあり、九条政基の時代までには、「平地」名の低段丘面の水田開発が進展した。

このように、中世（鎌倉～戦国期）から現在に至る水田開発史および水田景観形成史を辿ることができるのが、大木の水田の最大の特質である。大木では高段丘部に畦畔の曲線が美しい棚田景観が広がるが、これは中世の「淵」「谷」「窪」の水田を継承したものである。この棚田の灌漑水源は、はじめ谷の淵水や谷に築かれた溜め池であり、次いで上流に取水堰を設置して溜め池を連結した河川灌漑水路である。一方、低段丘部には「垣内」「平地」名を継承する段丘差の緩やかな水田が広がる。特に樫井川左岸の水田の灌漑は、1キロ以上も上流に取水堰をもつ大井（おい）水路に支えられている。

低段丘の水田はもとより、高段丘の棚田にして



大木の高段丘の棚田



大木の低段丘の水田（圃場整備着工前）

も大木の水田は、溜め池灌漑と河川灌漑が有機的に結びつけられ、水利用が高度に進化した効率的な灌漑により営まれてきた。大木の歴史的・伝統的な水利体系は、降水量も溜め池集水面積も小さいという不利な環境を克服して生まれた。大木の棚田の水利灌漑上の特質がここにある。

中世以来の水田景観が広がる大木は、日根荘(中世荘園)に関係する遺跡(荘園遺跡)が多数存在し、寺院や神社が国史跡に指定されていることでも知られる。いわば、生きた中世荘園の野外博物館とも言うべき地域なのである。中世以来、先人の営為によって守られてきた大木の水田景観は、伝統的な水利体系がつくる毛細管の如き水路網や、水路が取りまく小区画水田の微細な段丘地形(棚田景観)によって形づくられる。こうした大木の水田景観は、荘園遺跡を伴う景観(荘園景観)としての特色を有している。

残念なことに、大井水路掛かりの樫井川左岸の水田景観は、昨年末からの圃場整備の着工によって破壊されてしまった。しかし、棚田の文化的景観が全面的に消滅したのではない。圃場整備に連動する営農振興施策のなかでは、休耕地におけるオーナー制度やボランティアの導入などが謳われている。今後、オーナーやボランティアとなり得る近隣市民を呼び込む上でも、美しい棚田の水田景観とその保全が大木の魅力・財産として、営農や村づくりに重要な意味を持ってくるに違いないと思われる。

棚田の復旧や 地域の諸資源を活用

小谷村「中谷郷が元気になる会」吉田忠文
(農政ジャーナリストの会)

長野県小谷(おたり)村は'98年冬期オリンピックの主舞台となった白馬村の北隣り、塩の道・千国街道で知られた北アルプス山麓の里。林野率は90%、その名のとおり、小さな谷間や沢筋に

54の集落が点在し、狭い棚田がへばりつく信州でも有数の豪雪地帯である。

「緑と雪と温泉のふるさと」のキャッチフレーズも、スキー人口の激減で、色褪せてきた。公共事業の減少や農林業の地盤沈下も著しく、まさに「過疎」の典型といえよう。

しかし、平成大合併に抗して、豊かな自然と歴史的景観、伝統文化に誇りと愛着を持つ村民は、大町市や白馬村からの誘いに応じず、自立の道を選んだ。5年前に始まった第4次総合10ヵ年計画の後期計画では、村民中心の委員会が『自立5ヵ年計画』を策定、今年度は自立元年でもある。

小谷村は昭和33年4月、旧南小谷・中土・北小谷の三村が合併して生まれた。それから48年、村の推移を概観しておこう。

当時の人口(昭和34年住民基本台帳)7,679人は平成18年3月末で3,719人(高齢化率33%)と半数以下になった。『村勢要覧資料集』等によると、昭和35年から平成17年までの間に、農家数は1,253戸から461戸、田は507haから実質作付面積約120ha、畑は225haから同約30haとなっている。桑畑は108haがゼロに、草地等も20ha程度にすぎない。

平成12年度からの中山間地域等直接支払制度は、過疎化が深まる当村にも、シルバー世代の協働意欲を高めるきっかけとなった。昨年度の協定集落数は28(通常単価3集落・8割単価25集落)、交付対象協定面積は168haで422人が参加している。うち田が167haを占めているが、その93%(155ha)は傾斜20分の1以上の急傾斜地である。協定面積には畦畔や転作田も含まれるので、水田のほとんどは畦畔の多い棚田であることが分かるだろう。

ここでは政府の「食料・農業・農村政策対策本部」(本部長・小泉首相)から、平成17年度の「立ち上がる農山漁村」(全国30例)のモデル農村地域に選ばれた「中谷郷が元気になる会」(小林守男会長)を紹介しておきたい。

中谷郷は旧中土村の中谷川に沿って点在する集落の通称である。北小谷地区(今年3月末現在で



19枚・50aを復旧した「真木の棚田」



300枚を30枚に整備する「阿原の棚田」

10集落、210戸・474人、高齢化率53%）とともに、著しい高齢化（同16集落、160戸・335人、同47%）に悩まされてきた。10戸以内の集落も半分の8集落を数える。

全戸が加入する「中谷開発委員会」の下に平成13年から中谷郷「おらが里」（山本国弥代表）づくりを進め、民俗資料館や山野草園の造成・維持管理に努めるとともに、炭焼き・炭俵編み、木びき・丸太びき・薪割、キノコ植菌、下草刈り・枝打ち、わら細工、ヒョウタンの絵付けなど多彩な「農業・林業・手作り体験」を重ねてきた。最近では武蔵野市・清水市・釜石市の中学生や都市家族など年間千人以上が「体験学習」に訪れている。専門のインストラクターも20人以上に増えた。

こうした活動をさらに発展させる目的で「元気になる会」は昨年度に発足。目下、50人の会員が企画宣伝部、棚田部、自然歴史文化部、市民農園部、食文化部、農林業体験部の6部会を担当している。棚田部は耕作放棄されていた真木集落の棚田（標高600m）の復旧に取組み、19枚・50aを秋に復田。6月から池原・伊折集落とともに、村初めての棚田オーナー制度をスタートさせた。3集落で22組が契約している。

村が21年続けた山村留学の自主運営（相沢誠男育成会長）にも乗り出したが省略する。

一方、北小谷の深原集落では6ha・300枚の阿原棚田を30枚にする圃場整備事業が進行中。遅い雪解けを待ちかねて、多くのカメラマンが押し寄せた。（筆者は小谷村在住）

土谷棚田の火祭りが “ふるさとイベント大賞”を受賞

安井一臣（東京都練馬区）

長崎県松浦市福島町（旧北松浦郡福島町）の“土谷棚田の火祭り”が平成18年3月、（財）地域活性化センターの第10回ふるさとイベント大賞・部門賞（産業・観光部門）を受賞した。平成17

年2月、全国農村振興技術連盟による農業農村整備事業広報大賞・優秀賞の受賞に続く荣誉である。

受賞の対象となった火祭りとは、空き缶に少し灯油を入れ綿の紐を芯にした手作りの松明を田植え直後の棚田の畦々に立てかけ、夕暮れ時から火を灯して幻想的な風景を楽しむというものである。平成15年から始まったこの催しも、最初は松明1200本を灯す規模からスタートしたが、年毎に新聞やテレビの注目度も高くなり、今年は松明2000本、観衆3000人以上、プロ・アマのカメラマンが据える三脚500台以上という規模にまでなった。

土谷棚田がある福島町は、かつて炭鉱と農業、漁業で栄えた町であった。しかし、時代の流れとともに先ず炭鉱が消えた。その後、農業と漁業の衰退を迎え、過疎化と高齢化がこれに追い討ちをかけた。その結果は火を見るより明らかである。

だが、土谷棚田が百選の棚田に選ばれたのを境に、多くのプロ・アマのカメラマンが夕日に映える棚田を褒めたたえるようになり地元の空気は徐々に変化してきた。その変化とは、地元の人たちも土谷棚田の素晴らしさに気づき始めたとも言え換えることもできる。事実、土谷棚田は夕日が映える海辺の棚田としては、全国的に見ても屈指の美しさを持つと言っても過言でない。このような変化を受けて、土谷棚田保存会を中心とする地元の有志が合い計らい、夕日が海に沈んでから、もう一度楽しめるようなアイデアに頭を絞った結果として行きついたのが火祭りだそうである。その一方、地元有志の頭の中にはもう一つの目的



があった。その目的とは地域の活性化である。そのためには土谷棚田の知名度を上げることが先決だと考えたそうである。近年の火祭りの盛り上がり様子から見ても、最初の目的は既に達したと言えよう。次の目的は、いよいよ地域の活性化である。地元と都市住民との交流も年毎に盛んになりつつあると聞いている。都市住民有志が立ち上げた土谷棚田ファンクラブの活動も活発に

なっている。気候も穏やかで人情も温かく、団塊世代退職者の田舎暮らしにも申し分ない土地柄である。火祭りオーナー制度や棚田米の直販もその一歩を踏み出している。真の意味での地域活性化とは、“そこで暮らす人たちがいきいきとした日々を送ること”とも言える。地元有志の懸命な努力を見るにつけ、その成果が結実する日が遠くないことを信じて疑わない。

日本の棚田百選

山浦早水の棚田

山浦早水棚田の里づくり実行委員会会長
渡辺 信雄

大分県玖珠町山浦早水（そうず）の棚田は大分県の西部に位置し大分自動車道高塚インターを降りて国道210号線に入り2段の滝で有名な慈恩の滝より県道を上り慈恩の滝の上1kmの所にあります。標高326mで早水集落は摺鉢状の底の部分に23戸の家屋が集まっております。集落の摺鉢状の斜面に約6haの田んぼが階段状に170枚あります。慈恩の滝に流れ込んだ山浦川の上流約2kmより農業用水路が引かれており、隣接する杉河内集落の水田と早水の棚田に豊かな水を供給しています。山浦川は玖珠町のシンボルでもある万年山の湧水が源流であります。その水で耕作され、又早水集落は寒暖の差の大きい所ありますので実に美味しいお米が生産されております。今年は、昨年の秋に棚田の約6割の水田にレンゲの種を播き、今年の5月には早水集落はレンゲの花で囲まれました。このレンゲを田んぼの肥料とし秋には棚田のレンゲ米が収穫されることでしょう。

山浦早水の棚田の集落より北側に位置する鏡山に昨年11基の風力発電の風車が建設されました。早水の棚田より8基の風車を真正面に眺めることが出来ます。5月に水をはった棚田の田んぼに映る風車にはしばらくの間くぎづけになることがあ

ります。数多くのカメラマンもやって来て写真を撮っております。こんな棚田の集落にもやはり高齢化はやって来ます。棚田であるがゆえに高齢者にはつらい農作業となります。又後継者の問題もあります。

私達は先祖から受け継いできた棚田という財産、文化を次の世代へ、いかにして残していかなければならないか。ただ今迄どおり残すだけではなく、どのような付加価値を付けて残さなければならぬか。こうした考えで立ち上げたのが山浦早水棚田の里づくり実行委員会です。役員11人で集落全員参加の里づくりの会です。平成14年に会が設立され、毎年田植え体験と秋の収穫稲刈り体験を行っております。1日のイベントですが早水集落のお年寄りから子供迄、他地区からの参加者と交流を行っております。

昨年の秋の稲刈り体験では子供達を主体とした紙飛行機製作飛ばし大会を行いました。他地区から多くの子供達が参加し集落のお年寄りの皆さんも大変喜んでおりました。今年はそうしたお年寄りに指導してもらって炭焼き体験を行う予定です。こうした都会の皆さんとの交流を深めながら山浦早水の棚田を守っていけるよう棚田のオーナー制度を計画しているところです。今年の秋には、美味しい山浦早水棚田のレンゲ米が収穫されます。もちろん全田、架干しです。棚田の架干し風景もすばらしいものです。レンゲ米も販売致します。是非風車の見える大分山浦早水の棚田へご来訪下さい。お待ちしております。



官庁ニュース

❖ 農村景観・自然環境保全再生パイロット事業について ❖

農林水産省農村振興局地域整備課

課長補佐(中山間事業調整班担当) 日置 秀彦

平成17年3月に閣議決定された食料・農業・農村基本計画では、農業は食料を供給する機能のほかに多面的機能を有しており、これらの機能を適切かつ十分に発揮していくためには、農業の持続的発展とその基盤である農村の振興を図る必要があるとされています。

農村の振興に当たっては、これまでのように都市との格差を是正するという画一的な考え方から、地域の個性・多様性を重視する形に転換するとともに、各種取組についても、地域住民だけでなく、価値観を共有する都市住民、NPO(非営利団体)の参画を得ていく必要があるとされています。

このような状況において、平成18年度からの新規施策で、公募方式により、農村特有の良好な景観形成の促進に向けた活動や、農村の豊かな自然環境の保全・再生の推進に向けた活動を実施するNPO等に対し、国が直接活動を支援する「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業」が認められたところです。

本事業は、景観保全活動や自然再生活動等、事業の趣旨に合う活動についてその経費の2分の1を助成する制度です。支援する団体は、公募方式により募集するNPO等の非営利団体とし、審査を行った上で決定します。平成18年5月現在、公募に向けて審査基準や公募の詳細な手続きを検討している段階です。公募の時期や手続きの詳細については、決まり次第農林水産省のホームページ等を通じて周知する予定です。

事業の概要は、次頁のとおりです。

都市、農山漁村等における良好な景観形成を促進するため、平成16年12月に景観法(平成16年法律第110号)が制定されるなど、地域の歴史や文化に根ざした良好な景観に対する人々の意識が高まっています。また、平成16年6月に文化財保護法(昭和25年法律第214号)が一部改正され、「棚田や里山などの人と自然との関わりの中で作り出された景観」が保護対象となり、農山村に特徴的な景観を有する棚田は、その文化的価値についての関心が高まっているところです。

本パイロット事業は、農村特有の良好な景観の保全に資する活動も助成対象としており、棚田の法面の保護補修等、棚田保全の取組の一助となるものと考えております。

この事業を実施することにより、行政主体のみならずNPO等の市民活動団体が活動を活発化し、地域における景観保全・自然再生活動が定着することを期待しております。

■ 助成対象活動

農村特有の良好な農村景観の形成及び農村の豊かな自然環境の保全・再生に資する活動

■ 助成対象団体

営利を目的としない団体(財務状況など実施能力を審査して決定)

■ 助成対象活動の対象地域

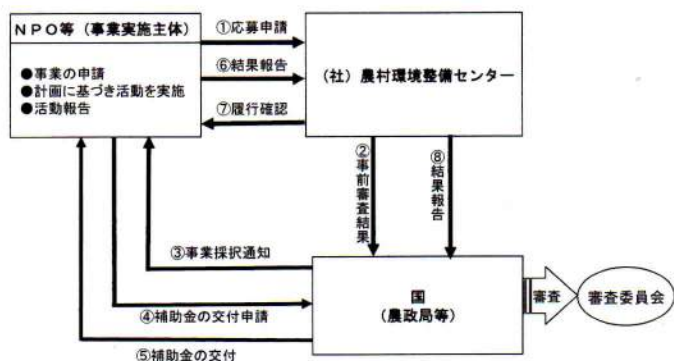
次のいずれかの区域であって、農業振興地域を主な場とする活動

- ・ 景観農業振興地域計画に定められた区域
- ・ 田園環境整備マスタープランで定められた環境配慮区域、又は環境創造区域

■ 助成対象経費

国が審査を行い助成対象活動と認めた活動に要する経費について、1/2以内で助成します(上限額150万円)。ただし、団体の通常の管理経費等は、助成対象としません。また、無償労務については一定の条件の下、当該団体の負担分として見なすこととしています。

■ 事業手続(イメージ)



ホームページアドレス

(http://www.maff.go.jp/nouson/hozen_saisei/index.html)

事務局ニュース

平成 18 (2006) 年度 石井進記念棚田学会賞の授賞について

棚田学会賞担当理事 千賀裕太郎

2006年度の石井進記念棚田学会賞の受賞者が、学会賞選考委員会（岸康彦委員長）の厳正な審議を経て、6月10日の理事会において以下のとおり決定されました。授賞式及び受賞者講演は、8月6日開催の平成18(2006)年度棚田学会大会において執り行われます。なお受賞者の並び順は申し込みの順です。

1. 受賞者

- (1) 千枚田ふるさと会（高知県梶原町）
- (2) 名月会・田毎の月棚田保存同好会・四十八枚田保存会（長野県千曲市）
- (3) 水俣市久木野地区振興会（熊本県水俣市）
- (4) 青柳健二（写真家・埼玉県狭山市）

2. 業績名及び授賞理由

(1) 千枚田ふるさと会

業績名：「日本の棚田オーナー制度の原点“神在居の千枚田”を守る」

授賞理由

棚田百選（農水省）に選ばれている「神在居の千枚田」で全国初の棚田オーナー制度を平成4年に開始し、市民オーナーと棚田地域農家との豊かな交流の下、3名のオーナー定住者を輩出するなど、市民参加の棚田保全の大きな可能性を全国に示した。こうした実績が全国棚田（千枚田）連絡協議会の発足を促し、第1回全国棚田サミットの開催地となるなど、一貫して我が国の棚田保全活動の先駆者として活躍している。

(2) 名月会・田毎の月棚田保存同好会・四十八枚田保存会

業績名：「名勝『姨捨（田毎の月）』棚田の文化的景観を次代に引き継ぐ」

授賞理由

『姨捨（田毎の月）』として由緒ある棚田地域の荒廃化を食い止めるため、オーナー田の維持管理・耕作指導（名月会）、耕作放棄田における耕作体験活動・耕作請負（田毎の月棚田保存同好会）、名勝指定（文化庁）されている棚田の伝統的形態保全活動（四十八枚田保存会）を行い、次代に貴重な文化的景観を継承している。また第3回棚田サミット開催地としてその成功に尽力した。なお「姨捨（田毎の月）の棚田」は棚田百選（農水省）に選ばれている。

(3) 久木野地区振興会

業績名：「都市住民との多彩な交流活動を通して棚田・森林の公益的機能への理解を広げた」

授賞理由

棚田の石積み体験や水源林の造成、炭焼き、棚田音楽祭、など、棚田地域の環境・文化を実感できるイベントを中心とした「村まるごと博物館」活動を展開し、地域住民に地域への誇りを呼び戻し、都市住民の間に棚田地域の多面的機能への理解を深めて、山村を大切する必要があるという世論形成に貢献している。なお「久木野の棚田」は棚田百選（農水省）に選ばれている。

(4) 青柳健二

業績名：「棚田写真集の出版等を通じてアジア・日本の棚田地域への関心と理解を広めた」

授賞理由

「アジアの棚田 日本の棚田（オリザを旅する）」「日本の棚田百選」等の出版、棚田の写真展、講演活動などを通じて、棚田の風景とともに棚田地域の人々の生活文化、食習慣、民族の歴史、気候風土等、棚田地域への幅広い関心を喚起し、棚田のもつ多面的機能の評価の定着に貢献した。

平成 18(2006) 年度棚田学会大会

日程) 8月6日(日)

場所) 三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

- ◆平成 18 年度棚田学会総会 13:00 ~ 14:20
- ◆棚田学会賞授賞式 14:30 ~ 15:20
- ◆シンポジウム 15:30 ~ 17:30
「棚田と文化的景観」
(要予約・入場無料/一般は資料代 1000 円)

◇報告

奈良俊哉(滋賀県近江八幡市文化政策部文化政策課専門員)

真島俊一(TEM研究所 所長)

本中 眞(文化庁文化財部記念物課文化財調査官)

◇パネルディスカッション

コーディネーター

千賀裕太郎(棚田学会理事/東京農工大学教授)

パネラー

奈良俊哉 真島俊一 本中 眞

◆懇親会 18:00 ~ 20:00

不二の間(同7階) 会費: 5000 円

第 15 回棚田学会現地見学会「山古志の棚田」

日 程: 平成 18 年 9 月 9 日(土) ~ 10 日(日)

参加費: 15,000 円程度

定 員: 25 名(定員になり次第〆切)

—詳しくは、別紙ご案内をご覧ください。—

『雲南省元陽県の棚田』

—棚田学会現地見学会報告—

発刊のお知らせ

棚田学会メンバーによる『雲南省元陽県の棚田』現地見学会報告集(写真 56 枚収録)を発行しました。ご希望により頒布価格にてお分けいたします。残部数に限りがありますので、お早めにお申し出下さい。

A4 版変型・60 頁・オールカラー・頒布価格 1,300 円(送料別)

お申込みは、棚田学会事務局まで

..... 編集後記

麦秋の季節、米麦の二毛作地域は農繁期の真っ只中にある。収穫の手伝いで汗をかいた首筋にムギの長い芒が触れてチクチクとした感触とその季節に小学校で教わった唱歌「おぼろ月夜」の一節が思い出される。私の最も好きな季節、棚田にも水が入り、早苗が風に揺らいている風景を見て、今年も豊作であって欲しいと願いつつ、学会通信第 19 号をお届けしたい。(中島)